



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

—あいなん音故地新—

芸術の地域格差

東京は文化と芸術に溢れている。至るところに劇場があり、コンサートホールがあり、美術館があり、映画館があり、図書館がある。行こうと思えばいつでも行くことができるし、そこで本物のアートに触れることができる。お芝居や歌舞伎、能、クラシック・オーケストラ。美術館では教科書でしか見たことのない作品がすぐそばで見られて、図書館に行けばインターネットでは探しきれない本が数えきれないほど置いてある。

芸術というのは想像力や感性を育て、自立心を芽生えさせる。お芝居や作品、演奏に生で触れたときの、会場に響く音や声、その空間とそれらを全身で感じる感動と興奮。絵を見て、本を読んで、その作品の背景や登場人物を好き勝手に想像する楽しさ。…愛南町ではどうだろう。

ある縁で私自身が演劇や能を鑑賞するようになって、文化芸術の地域格差を考えるようになった。この格差は東京-愛媛間でもあるよう思うのに、東京-愛南町間ならもっと大きい。愛南町の子どもたちに、その子どもたちを育てる大人であるみなさんに、“本物の芸術”に触れる機会を作りたい。小さな可能性をかき集めて、私にできることを探ります。

(テノヒラkiku)

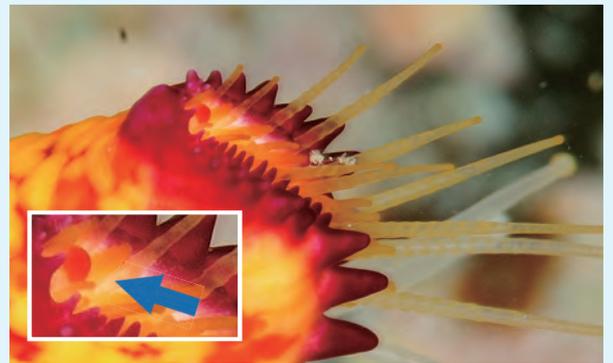


本日！海日和！！ vol.154 「神は細部に宿る」

立秋を過ぎて、暦の上では秋となったが、まだまだ暑い日が続いている。年々、残暑が厳しくなっていると感じるのは、私だけではないだろう。芸術の秋も、まだまだ先のような。

生き物が好きな私は、虫めがねのように物を大きくして撮影ができるマクロレンズをよく使う。いろいろな部分をアップで撮影し、陸に上がってから、写真でじっくりと観察する。すると、水中では気付かなかった多くの発見がある。

写真はアカヒトデの腕の先である。矢印の先にあるオレンジ色の球体が、眼点と呼ばれる目だ。視力はほとんどなく、光を感じる程度らしい。細く伸びているのが管足と呼ばれる無数の足だ。進行方向に伸ばし、先端にある吸盤で吸い付き移



【アカヒトデの腕の先】

動する。その周りには、スパイクのような棘が規則正しく並び、海底をがっちり捕らえる。

「神は細部に宿る」という言葉があるが、生きていくために機能的に進化した体は、美しさすら感じる。涼しくなった秋の夜長には、生き物たちの細部が見せる造形美を堪能したい。

(撮影地：カメラ)

ともてる
愛南サンゴを守る会 西尾知照